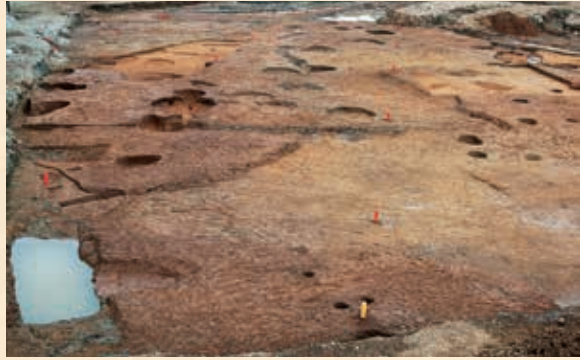


奈良時代の行田

7世紀中ごろ以降中央集権の国家体制が確立して行く中で、それまで埼玉古墳群などの大型古墳を築き、武蔵国造として権力を振るっていたと思われる行田市周辺の在地権力者たちは、急速に没落していったようです。

大宝元年（701）に大宝律令が制定されて律令制が確立し、奈良時代には行田市域は埼玉郡の一部となりますが、埼玉郡は5郷からなる下郡でした。かつて国造級の大規模古墳群が築かれた地域には、奈良時代以降も国府や国分寺が置かれて、地域の政治の中心地として繁栄し続ける事例が多く見られますが、行田市周辺には国府や国分寺はありますか、埼玉郡の郡寺も見当たりません。市内には大同年間（806～810）創建と伝えられる旧盛徳寺があり、埼玉古墳群を築いた権力者一族の氏寺とも考えられています。発掘調査では奈良時代までさかのぼる遺構や遺物は検出されておらず、現時点では大同年間創建の言い伝えを、うのみにはできません。



野合遺跡発掘調査区全景

それでは、奈良時代の行田市域は、古墳時代の在地の権力者と同様に衰退の道を歩んだのでしょうか。確かに市域では古墳時代のような華やかな文物は見られなくなりますが、古墳時代の大規模集落であった埼玉地区の小針遺跡や築道下遺跡、太田地区の北大竹遺跡、長野地区の馬場裏遺跡などは、奈良時代になってもその規模を維持し続けます。また、養老7年（723）発布の三世一身法、天平15年（743）発布の墾田永年私財法の影響もあり、長野地区の鶴巻遺跡、佐間地区の野合遺跡など、それまでほとんど集落が営まなかった場所にも新たに集落が営まれるようになるなど、地味ながらも着実に土地の開発が進められていたようです。

このように奈良時代の行田市域は、政治の中心地ではなく、大規模な開発は行われなくなっています。衰退してしまっただけではないのです。
（文化財保護課 中島洋一）

このコーナーでは、行田の歴史や名所、名物などを行田ゼリーフライキャラクターのこぜにちゃんが分かりやすく紹介します。



こぜにちゃんが行く!

ぎょうだまめきち 行田豆吉

江戸時代から、田んぼのあぜ道などで栽培されていた「行田在来青大豆」。行田豆吉は、青大豆の魅力を一でも多くの方に知ってもらうため、平成24年に誕生したキャラクターなんだ。

今までは、枝豆やラスク、まんじゅうなどの商品パッケージを通してPRしていたけど、先月、待望の「着ぐるみ」が完成したんだ。

くりっとした瞳に、おいしそうなおでこ。とってもかわいいから、人気者になること間違いなしだよ。

行田豆吉は、これからいろいろなイベントに登場するので、ぜひ声を掛けてくださいね。

今月の表紙

11月8日、利根大堰でサケ遡上・採卵観察会が行われました。

（独）水資源機構利根導水総合事業所が主催するこの催しは、今回で8回目。採卵会が始まるころには、親子連れなど大勢の方が会場に足を運びました。子供たちは、サケのお腹から卵を採り出す瞬間をじっと見つめ、その様子を心に刻んでいました。

市報ぎょうだに掲載されているあなたの写真を差し上げます。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当（内線318）まで。

市民の皆さんの市政に対するご意見をお待ちしています。

市報をCD-Rに録音したものを希望者宅にお届けします。ご希望の方は、広報広聴課広報広聴担当（内線318）までご連絡ください。



市報ぎょうだは再生紙を使用しています